

II 白糠地区 エゴノリ養殖試験 (要 約)

桐原 慎二

温排水を利用したエゴノリ養殖を行うための基礎的資料を得る目的で、暖流性海藻であるエゴノリ (*Campylaephora hypaeoides* J. Agardh) の養殖特性を検討した。

方 法

平成2年5月23日に白糠地先水深3mの地点から採取したエゴノリ四分胞子体を5gに細断して種苗とした。養成基質は直径50cm、高さ15cmの円筒形をした目合い7分の網地を1m間隔で3基連ねたものとした。これを12連分用意し、そのうち4連についてはエゴノリ種苗を各網地1か所ずつ(1連当たり3か所)、4連については各2か所(同6か所)、のこりの4連については各4か所(同12か所)に結着した。各網地が水深1、2及び3mになるように延縄式養成施設に垂下し、養成開始から1、2、3及び4か月後に当たる、6月30日、7月31日、8月28日及び9月20日の計4回、各々1連、計3連ずつをとりあげ、着生したエゴノリ湿重量を測定した。

考 察

エゴノリは6月、7月及び8月に、鉤状に屈曲した体先端部分で、基質の網目部分に絡んで生育するのが観察されたが、9月には生育が見られなかった。1連あたりの着生重量は、種苗を3か所に結着したもので6月、7月、8月に各々606.6g、1173.5g及び8.5g、6か所のそれで各々1445g、1575.2g及び81.3g、12か所のそれで各々731.8g、1194.8g及び87.5gで、いずれも7月に最大となった。なお、9月に藻体が流出したのは、8月に四分胞子の形成が認められたことから成熟による枯死と推察された。

エゴノリ養殖で種苗の量と収量について検討例はないが、本結果では、種苗結着数の寡多と養成後の着生重量には明瞭な関係が認められず、5gから20gの範囲で特に養成に有利な種苗重量を求めることができなかった。

水深が養成に及ぼす影響については、水深1mの網地には2m、3mのものよりおおむね着生量が多く、浅所ほど生長に適すると推察された。

エゴノリは主に寒天原料として利用されるが、その漁獲量には年変動が激しく、また漸減傾向にあるため、養殖技術の開発が望まれている。白糠地先においてエゴノリが養殖できることが確かめられたので、今後、さらにその養殖特性を検討する。